

華麗な人 karei na hito

遍路10回 感謝の歩み



脚

土の道踏みしめる喜び

公認先達・歩き遍路の会長 山下正樹さん (70)

白衣にすげ笠、金剛杖を突き、リユックサックを背負う。山下正樹さんは、四国八十八カ所の霊場を結ぶ1200キロの道をひたすら歩く。

2002年、定年まで2年を残して大手銀行の関連会社を辞め、八十八カ所を徒歩で一気に戻る「歩き遍路の通し打ち」に挑んだ。出世競争と不本意な出向を経験するうち、お遍路への憧憬が募った。組織や上下関係と決別し、一人の人間として巡

結願するお遍路さんは年間15万人だが、ほとんどはバスやマイカーを利用し、徒歩は5千人程度。結願を4回以上果たすと、四国八十八ヶ所霊場会から「先達」に公認される。

先達は9千人いるが、歩き遍路だけで達成するのは数えるほどだ。年に3カ月はお遍路に出る。札所から札所への道のりは長いところで80キロ。厚底のウォーキングシューズをはいた左右の脚を、ひたすら交互

に出す。頭が空っぽになり、悩みなんでどうでもよくなる。「歩き遍路の魅力は札所をつなぐ遍路道にこそある」と言う。1200キロの行程のうち1千キロは舗装されている。「お遍路にとって、国道は「酷道」。土の道を歩くと脚が喜びます」

歩き遍路の良さを伝えるのがライフワークだと思っている。毎年春に歩き遍路の入門講座を開き、初挑戦のお遍路さんに同伴する。廃道になったかつての遍路道の復元に、仲間先達と取り組んでいる。88歳まで歩き遍路を続け、「歩き続けるその脚で棺おけに入りたい」。棺の中には、最初の通し打ちで使った、1斤ほどにすり減った金剛杖を入れてもらうと決めている。(畑川剛毅)



すげ笠には雨漏りを防ぐ柿渋を塗る。錫杖がついた橙色の金剛杖は先達だけに許されている。滝沢美穂子撮影

山下さんへ ありがとう

8月下旬、記者も白衣に輪袈裟で1番札所から5番札所まで同行させていただきました。強烈な日差しと舗装路の照り返しに、歩き遍路即修行を痛感。札所で般若心経を唱えると頭の中にお経が共鳴し、一瞬だけ心が軽くなった気がしました。11月14～16日に21番太龍寺と22番平等寺を結ぶ「いわや道・平等寺道」(徳島県阿南市)の遍路道復元作業があり、15人ほどボランティアを募っています。道標の取り付けなどです。詳しくは山下さん(090・5648・1989)へ。